

人口減少下での地域の未来を考える

「消滅」でも「創生」でもないホンモノのまちづくり

青柳 暁 寛 一般財団法人室蘭ルネッサンス副理事長兼常務理事

松永 英 樹 輪西商店街振興組合代表理事
むろらん商店街づくりサポートセンター長

石川 昌 希 室蘭民放社編集局報道部記者

吉岡 宏 高 札幌国際大学観光学部教授

司会・佐藤 克 廣 北海学園大学法学部教授

佐藤 吉岡先生の講演は聞く度に水準が高まり、実践を通して理論がレベルアップしていて、いつも感心して聞いています。このあとは、吉岡先生の基調講演を受け、ディカッションをすすめます。テーマは「人口減少下での地域の未来を考える」で、パネリストはそれぞれ室蘭でご活躍しておられる方をお招きし、室蘭での実践、日頃お考えなっていることをお話しいただき、その後会場からもご意見を伺います。最初は青柳さんお願いします。

室蘭ルネッサンスの目標

青柳 室蘭市内に、標高二〇〇メートルの測量山があり、私たち（財）室蘭ルネッサンスでは、この山の電波塔のライトアップを行っており、今年は四月一日に連続点灯一万日の記念式典を行いました。そうした取り組みへの評価をいただくなかでの、この自治研集会にお招きいただいたと思います。

一九八八（昭和六三）年四月に室蘭ルネッサンスが発足し、当初、財政部門の「室蘭市民財団」と運動部門の「室蘭再開発市民協議会」の両輪でスタートしました。いまお話しした希望の灯「測量山ライトアップ」は同年一月二八日に初点灯し現在に至っております。これよりあとは、現在までつながっている事業の取り組みを通じてお話ししたいと思います。

一九九〇（平成二）年、鯨・イルカウォッチングを提唱し、六月から八月までの三カ月間ウォッチングクルーズが行われています。また、観光だ

けでなく、学術的なものも取り入れて、調査研究のまちにしたいとの思いもあり、当時の岩田弘志市長とともに、「噴火湾海洋動物観察協会」を設立し、東京大学、東北大学、近畿大学から海洋研究生を受け入れ、その連携の中で「鯨・イルカウォッチング国際フォーラム」も開催しました。室蘭市のキャラクターマークの「くじらん」は室蘭ルネッサンスの事業がきっかけとなりできたものです。

もう一つ、米国のペリーが浦賀に来る五〇年前の一七九六年、英国の探検船「プロヴィデンス号」が室蘭に來航した折、燃料の木材を伐採中にオルソンという水兵が事故死し、室蘭港の入口にある大黒島に埋葬したという歴史のもとに、「プロヴィデンス号來航二〇〇年祭」を開催し、英国駐日大使が初めて室蘭を訪れました。これは経費的にもルネッサンスの行った最大の事業で、祝津の海岸にプロヴィデンス号のミニユメントを作成し、沖繩の平良市（合併により宮古市）とも、そのつながりで、友好都市になっています。

二〇〇一年、平武彦理事長（故人）が就任したとき、前理事長より五年間を目的に活動をしてほしいという申し送りがあるくらいに、当時財団の財政が緊迫したなかでの引き継ぎでした。室蘭ルネッサンスは、全国で唯一の市民財団で、市、道、国からの公的な助成は一切なく、あくまでも、室蘭の市民、団体、企業からの寄付金のみで運営してきた結果でした。加えて、前理事長、会長とともに、役員のお三分の一が退任しました。平理事長はその大変な状況下で、存続のため改革を

始めました。

まず、まちづくりの運動目標を、長くそして多くの市民と関われる事業に特化するという考えの基に、事業を取捨選択するなかで「この街が好きだから今室蘭ルネッサンス」のカレンダーを、月に、写真、文章、俳句、短歌を一般公募しました。それまで、担当者が一人で製作していましたが、現在は四十数人の市民が関わっています。また、経費も二分の一になりました。

次に、一九九二年より統一祭「室蘭ねりこみ」を開催しています。室蘭のまちは沢毎に発展したため、横のつながりがなく、市内には五〇余りのお祭りがありました。室蘭が一つになることを目標とした「室蘭ねりこみ」は今年で二五回目となりました。約一六〇〇〜二〇〇〇人の担ぎ手が参加し、室蘭ルネッサンスの事業の柱の一つになっています。

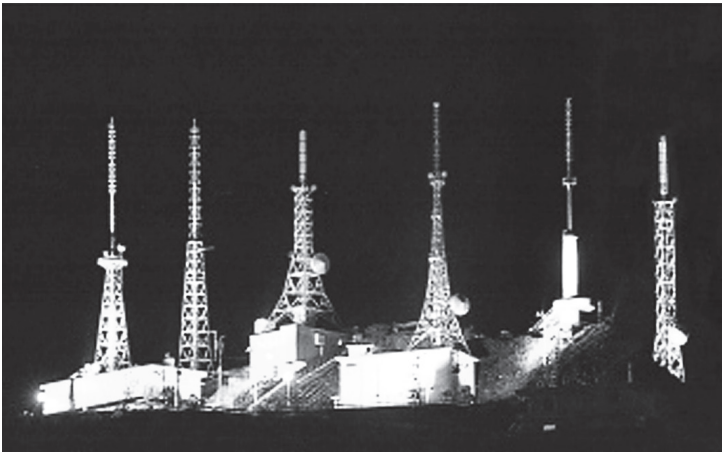
希望の灯がルネッサンス発足の原点

青柳 一番力を入れている事業はやはり、測量山のライトアップで、これが室蘭ルネッサンス発足の原点です。一九八五年、新日鐵室蘭が溶鉱炉を休止すると報道され、そのとき市民が一丸となり、一カ月半で一三万五〇〇〇人の市の人口を上回る、二五万人の署名が集まりました。当時、西胆振八市町村で約二八万人の人口でしたから、それだけの署名を集めたのは室蘭市民の地域力だったと思います。この地域力を活かしたまちづくりができないか、ということで室蘭ルネッサンスが

発足しました。

室蘭のまちの構成要素は、街場、労働者、大企業、の三つに別れ、それぞれ異なるまちでした。新日鐵がなくなるかもしれない有事のときに、三者が一体となり署名活動をしました。それまでは考えられないことでしたが、この力が室蘭ルネッサンスを生み出しました。当時、市内の労働組合は総評（日本労働組合総評議会）系と同盟（全日本労働総同盟）系にはつきり分かれていて、バラバラでしたが、このときは一緒に活動をしました。

写真1 測量山のライトアップ



(室蘭ルネッサンスホームページより)

労働組合と市民そして産業界も一丸となった取り組みは、この署名活動が始まりました。これ以降、室蘭ルネッサンスの設立から現在まで、労働組合からも役員として協力をいただいています。

ライトアップは現在連続点灯が一日つづいており、点灯費用は市民の浄財で成り立っています。一点灯五千円から始まり、現在は四千円で、自治体や大企業からの応援は一切ありません。個人や組合などの団体、地元の会社のつながりで、それが一日以上つづいています。点灯にエントリーしたのは、今日（九月九日）現在で、一万一四二一の個人・団体・企業です。

長くつづいている理由の一つは、室蘭民報、北海道新聞室蘭支社のご支援をいただいていることです。寄付した人の点灯に込められたメッセージを新聞で毎日報道してもらうことで、寄付が目に見えるかたちになりました。そして市民一人ひとりの希望の灯として、成り立つてきたことです。

長年の間に幾度か危機もありましたが、市民をはじめ組合や団体、地元企業の協力を支えに、希望の灯をさらにつづけていく運動をしていきたいと思っています。

佐藤 ありがとうございます。つづきまして松永さんお願いします。

輪西の街がなくなる危機感からコンパクト化へ

松永 かつて人口が二万人いた地域が現在四千人になった室蘭市輪西地区のコンパクトシティに

ついでお話しします。コンパクトシティは、構想の段階から吉岡先生に大変ご尽力いただき、今日の基調講演を聞いて、吉岡先生に後押しされた事業だったと改めて実感しています。

私は室蘭で生まれ育ち、大学進学から一〇年間室蘭を離れましたが、一九八九年、家業の酒屋を継ぐため室蘭に戻ってきて、活動をつづけています。現在、コンパクトシティの核となる「ぶらつと。てついち」という商業施設の代表しています。

室蘭のまちは港湾を囲むような馬蹄型のかたちで、白鳥大橋がつながっています。輪西は東室蘭と室蘭の間にあり、新日鉄住金製鉄所の城下町です。最盛期には定住人口が二万一千人ほどいて活気のある商店街でしたが、石油ショック以降、製造業の構造不況による合理化で急激に人口が流出し、現在は三四〇〇人ほどまでに減少しました。当然商店街の店舗も少なくなり、櫛の歯が抜けたような状態でした。室蘭市の人口のピークは一九六九年の一八万三千人で、二〇一六年八月末で八万七千人と半減しています。

私が室蘭に戻った一九八九年頃、輪西の人口は七千人くらいで、往時の三分の一くらいにまで減少し、輪西の街がなくなってしまうのではないかと、という危機感がありました。

まちなコンパクト化のきっかけになったのは、一九九五年に策定した「室蘭商業近代化計画」で、この計画をつくるときに吉岡先生が旧たぐん総合研究所におられて手伝っていただきました。計画はつくって終わりとなりがちですが、商業近代化計画が実現しなければ街がなくなるという危機

感を共有し、計画に沿って動きだしました。

基調講演のなかで光の当て方で見方が違うという話があったように、輪西は新日鉄の合理化で人口が減少しましたが、逆に見ると人のいなくなった輪西は一等地になる。街の真ん中に新日鉄の施設があつて人が沢山いたのが、人がいなくなつて中心に空き地ができ、この土地を自由に使える、という発想で取り組みました。

九七年に輪西地区活性化推進協議会を設立しました。こうした取り組みは商店街の人だけでやってもダメなので、連合町内会、行政、企業、学校など多方面から約四〇人がメンバーになって、一年以上かけてワークショップ方式で議論を重ねてきました。

議論を経て、翌九八年に「子に孫に残したい輪西の将来像」の提言をまとめ、これに沿って九九年、まちづくり会社「輪西開発」を設立し、事業をすすめることにしました。

提言の「子に孫に残したい輪西」の柱は、①輪西を機能的でコンパクトな街に再編しよう②商業機能の集積を進めよう③再編の為の街の核をつくる、の三つでした。

最初に取り組んだのは、三番目の再編のための核づくりです。輪西開発を設立し、行政との連携を図り、街なかの遊休地を活用して、公共施設と商業施設をつくる計画を策定しました。当時注目されたはじめたPFI方式とNPOによる運営を検討し、完全なPFIではありませんが、私たちが施設をつくり、施設は行政や組合に買い取つてもいい、運営はNPOで行うことにしました。

「ぶらつと。てついち」と市民会館併設 活性化に寄与するコンパクト化の取組

松永 二〇〇一年一〇月、複合商業施設「ぶらつと。てついち」が完成し、翌〇二年七月市民会館が完成しました。ワークショップでの議論を元に、自分たちでつくる市民会館を核に新しいまちづくりを行い、行政は手伝ってほしいという姿勢です。できてきました。コンパクトで使い勝手のいい新しい機能を持った市民会館をつくり、自分たちで運営するという考え方です。

従来の市民会館は六五〇人くらい収容できる大ホールがありましたが、市民が使いやすいことを前提に五〇〇席に減らしました。NPOが運営するので、どんどん営業しよう、ホールと会議室は一日二回転、三回転させて取入を増やすことを考えました。会議室は様々な大きさに分割できるようにし、かつ結婚披露宴や葬儀にも使えることを想定しました。

民間会社の輪西開発が市民会館を建て、完成後室蘭市に売却し、運営は私たちNPO法人市民会館運営委員会に委託してもらうかたちにしました。私たちはここまでできるので、行政にはこの点を手伝ってほしいとバックアップをお願いする姿勢で、行政と話し合ってきました。全道的にも市民会館の指定管理を受けたのは早い事例だったと思います。

コンパクトシティに向けた三ステップとして、第一段は街の核づくりで、市民会館と商業施設を

図 輪西商店街の通りと「ぷらっと。てついち」、市民会館の位置



つくる。これは二〇〇二年で完成しました。第二段は、街の背骨となる通りの七条の整備と商業集積を図る。第三段は、それにもなって定住対策をすすめることです。

輪西の街は一条から二三条までの縦通りがあり(図)、横に商店街の仲通り、社宅通りがあります。人口が二万人いたときは、通り全体が商店街になっていましたが、人口が五千人台になると、商店街は歯抜け状態になり、八〇〇メートルくらい歩かないと買い物ができないようになりました。このため、街の核となる商業施設の集積を図

ることにしました。地図の外側には、斜面に張り付くように住宅がありかつ高齢化がすすんでいたで、街中の平地に移るようにし、コンパクトなまち輪西の住みやすいまちづくりをすすめてきました。

二〇一三年に補助金を活用して七条通りを整備しました。段差を解消し、約六千枚のデザインブロックを使い、輪西のシンボルのワニを現しています。総額一千万円の事業で、三分の二補助なので、約三〇〇万円を商店街が銀行から借金をして負担しました。こうした整備をしながら、七条に商業集積をすすめています。

定住化の推進として、七条通りに商業集積をすると空き地がでてくるので、坂の地域から平らな地域に人が移り住んで来ると思ったのですが、坂のまちにはそのまちのコミュニティがあり、移りたくない人が多くいます。また、移りたい人は、家屋土地の不動産をどう整理するかの問題があります。一方、輪西は利便性があるので、新日鐵住金の独身寮や関連会社の独身寮ができ、当初の思いとは異なりますが、定住化がある程度図られています。

一九八九年に約七千人だった人口は現在三五〇〇人くらいで、人口減少はつづいています。このコンパクト化の取り組みは、まちの活性化に確実に寄与していると思います。一つは、輪西の商業機能を残していくことができました。まち活性化の起爆剤として新しい店舗ができた。まち活性化の起爆剤として新しい店舗ができたので、改修する店舗がでてくるなどの動きがあります。この

写真2 ボルト人形ボルタ



計画に取り組まなければ、輪西はいまほど活気がないと思います。

そして若い人たちの新しい動きが生まれたことです。ボルト人形ボルタ(写真)は輪西から生まれました。室蘭は鉄のまちなので、それにちなんだものを作りたいと商店街の若い人を中心に、室蘭工業大学との共同開発でボルタが生まれました。さらに、子ども達のためのものづくり体験工房「輪西八条アトリエ」や、室工大が空き店舗を利用してサテライトキャンパス「テクノアゴラを」開設し、ものづくり教室など大学の地域活動の拠点に



あおやぎ あきひろ 氏

なっています。輪西の地域が頑張っているの、一緒にやりたいという人が沢山出てきています。まだ発展途上ですが、これからも輪西のまちづくりに取り組んで行きたいと考えています。

地域を好きになって魅力を伝える

佐藤 ありがとうございます。次に石川さんお願いします。

石川 私は、二〇〇五年に室蘭民報に入社し、一五年からは経済分野を担当しています。室蘭市内の商店街や金融機関、商工会議所、観光協会などを主に取材しています。日頃の取材を通して、感じていることをお話しします。

二〇一三年の室蘭民報の年間テーマに「地域再考」を設定しました。室蘭の商業の歴史を振り返ると大型店は切り離せない存在でした。一九八一年に丸井今井室蘭店、長崎屋室蘭中央店、室蘭ファミリーデパート桐屋の三つの大型店が同時期にオープンしました。その後、買い物客の他地域への流



まつなが ひでき 氏

出と減少により、二〇一〇年に丸井が閉店、二〇一二年に長崎屋室蘭中央店が閉店しました。

室蘭における大型店は、市民の憩いの場として集う地域コミュニティの場の役割も果たしてきました。このため、大型店閉店後にどのようなまちづくりをすすめるか、地域全体がどんな将来ビジョンをつくるのか、という観点から「地域再考」というテーマにしました。

商店街、まちづくり団体、体育協会など、さまざまな団体が室蘭を活気づけるためにどすばいのか。現状と課題は何かを突き詰めて連載しました。室蘭市内を五地区に分けて、年間を通して掲載してきました。当時の取材と、現在のさまざまなまちづくり団体の取材をして改めて分かってきたことは、人が減少しているなかで、いかに地域資源を有効活用して人が集まる場所をつくりたいことが重要になると思います。そのためには、地域に住む人たちが地域の魅力をいかに伝えられるか。端的には、自分の住んでいる地域を好きになれるかがポイントになると思います。



いしかわ まさき 氏

どんなことにも共通しますが、自分が好きでないことは、ほかの人に紹介をしたり、勧めたりできません。室蘭の地域にあるお店を紹介できずに、人が回らなくなってしまう悪循環に陥っている気がします。

室蘭を例にあげれば、自分が自信を持って紹介できるお店は、取りあえず何でもあるからいいではなく、このお店のここがいいと具体的に紹介できるポイントがあればいいと思います。このラーメン屋さんはドリンクサービスがある。このお店のカツカレーは大盛りで食べ応えがあるなど、ほかのお店にない特色を紹介できれば、口コミとなつて新たな集客のポイントになると思います。地元のお店を知り、回遊性が生まれることによつて地域全体の盛り上げにつながると思います。

地域の商店街、各まちづくりの団体は、室蘭を盛り上げようと日々努力しています。地元の新聞社として行動を丁寧な追いかけ情報を集め、記事にして読者に伝えるのが私たちの役目だと思っています。

日頃の取材活動を通じてこれらのさまざまな動きを伝えていければと思っています。

佐藤 ありがとうございます。青柳さんからお話しがあった、測量山のライトアップは室蘭の活性化につながっていくもので、そしてキーワードは市民一人ひとりの力を合わせていくものになると思います。

松永さんは輪西地区のコンパクトシティのお話として、地域の課題を自分たちで解決するためにはどうしたらいいか、そのヒントが詰まっていたと思います。

石川さんからは、さまざまな地域を取材して、地域の課題と発展の芽を紹介していただきました。これらの話を受けまして、吉岡先生にコメントをお願いします。

実践の準備運動と構想し伝える力

吉岡 松永さんとは二〇年来の付き合いなので、感情移入してしまいがちですが、先ほど私は「行



よしおか ひろたか 氏

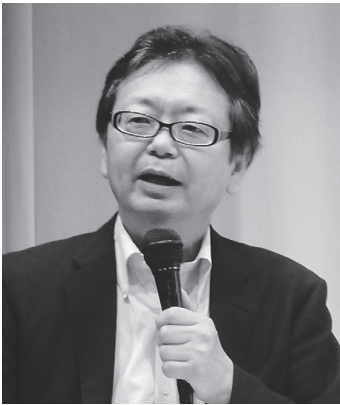
政と一緒にパートナリーシップで」と簡単に言いましたが、輪西のまちづくりの裏側には凄まじいドラマがあります。

最終的にはパートナリーシップの関係になりましたが、最初は、徹夜で企画案をつくり行政に持っていくと、行政の担当者は「こんなのできるわけがない」と実際に物理的に投げ返してきました。

ここからのスタートで、「こんな担当者は辞めさせてしまえ」と皆が思ったのですが、その後この担当者が取り組みの一番の理解者、推進者になってくれました。よくここまで走りきってくれたと輪西に関わって思いました。

室蘭の事例で重要だった要因の一つは、「機を見て行動する力」。青柳さんは新日鉄の高炉が止まったのをきっかけに、ライトアップを始め、ここはチャンスだとまちをまとめるのに「ねりこみ祭り」をやった。

まちづくりには、タイミング、機をみる力が大切ですが、実力がないと具体化できないし、準備運動がないと機会が訪れても実現するのは難しい。



さとう かつひろ 氏

準備運動が大切で、いろいろ実践をして失敗をするなかから、方向性や打開策がみえてきます。

もう一つは、「考える力」です。ライトアップしかり、輪西の取り組みもそうです。どう捉え、どのようにやっていったらいいかは、自らがまちの特質を踏まえて考えていかなければならない。輪西の場合は、私がたくさん総研のときに関わり、お手伝いしました。どこの地域でも、まちのことを考える人、構想する機能が重要です。ローカルシンクタンクの役割が大切で、小さなまちであればこそ、役場の職員が地域のシンクタンクの役割を担ってほしい。事業ベースで考えるのではなく、

自分たちは何をしたいのか、私たちは何を目指したいのかを意識し保持することが大切です。その点、輪西の場合は明確で、住み続けるにはどうしたらいいか、そのためには集う広場が必要で、コンパクトにしないと老人は生活できない、これらのことをみんなで話し合って進んでいった。住民や企業を広く巻きこんだワークショップでの話し合いがあったから、ここまで到達できました。まだここを頑張らなければならぬ、ここは整理しなければならぬとか、時々状況把握できたのです。

意志を持つ、共有する仕組みは大事なことで、他者が考えてくれることではなく、自分たちで考えなければならぬ。実践の準備運動のなかから、方向が明確になったりすると思います。

仲間を増やそうとした際に、「室民さん」と呼ばれるローカル紙の室蘭民報が地域により沿って報道してくれたので、報道を切っ掛けに仲間の輪

報道して

が広がったり、動きが加速されました。道内のどの地域にも地元紙があるわけではないので、自分たちの思い、活動を伝えていくには、工夫が必要になり、私も悩むところでした。一生懸命やっていることと、伝えることは異なるので、室蘭民報のように伝えてくれる存在は大きい。空知管内には「プレス空知」というローカル紙があり、地域の活動を紹介していますが、小さなまちではそうした手段がないので、悩んでいる点です。

コンセンサスを得られず失敗したことも

佐藤 補足的にお伺いします。青柳さんから室蘭ルネッサンスの成功事例を紹介していただきましたが、必ずしも巧いかなかった場合もあると思いますので、可能な範囲でご紹介ください。

青柳 二九年の間にいろいろ事業をやりました。会の財政が安定しているときは、市民大学として室蘭ルネッサンス大学を開校し、著名人を招いて文化講演会を六回行い、お金のかかる事業でした。

二〇〇一年、平理事長に交代したとき、事業、財政ともに根本的な見直しを迫られ、単に事業を減らすのではなく、室蘭ルネッサンスの基本的な考えを見直すことに至りました。そうしたなかで、先ほど紹介した、カレンダーの作成、ねりこみ祭り、ライトアップは、継続をテーマにした事業です。理念というほどでもありませんが、私たちの取り組みはいつも「理想は高く、現実には控えめに、できることを頑張つてやる」と心掛けており、それは目的を明確にすることだと思います。

いまは「継続は力」とつづけることを目的にしていますが、目的は時代によって変わっていくものです。ライトアップの究極の目的は、室蘭ルネッサンスの理念でもある「室蘭の誇りづくり」です。

そういつたなかで失敗例を一つ紹介します。二〇〇六年に「歓鯨ウエルカムパス運動」を始めました。ウエルカムパスは、商店や飲食店などの協力を得て、割引や飲み物等、店独自のサービスを受けられるカードです。室蘭に転居してきた人に対し、一年間使えるウエルカムパスを発行、市内の大きな企業には長期滞在者もおおり、六カ月以上の滞在には三カ月間有効のパスを発行しました。

行政の協力も得て、市の窓口で転入手続きをした人にウエルカムパスと、パスを使える店舗のパンフレットを渡してもらいました。各企業からは長期滞在者を教えてもらい、パスを渡しましたが、残念ながらこの事業は五年間で終了しました。

終了したのは、コンセンサスを得られなかったことが最大の要因です。ルネッサンスが行う事業と行事は、自分たちで考え、自前のお金で、自ら実行してきました。ところがウエルカムパスは、各事業者が取り組みの理念を理解して、それぞれが利用者に対応しなくてはならない。各事業者がおもてなしの心を持っていかなければできない。そのコンセンサスが抜けていました。

目的はいいと思ったのですが、十分に理解を得ないで始めた結果、四五〇社が賛同してくれたのですが、一部の提供する側がなぜこの人たちにサービスをしなければならぬか、といつも迷っていました。外から来た人を優遇して、毎日のように

来ている地元の客になぜ割引がないのだ、と地元一般客から指摘されるようになり、その声が市役所側にも伝わりました。

ルネッサンスとしては、転居してきた人を市民みんなで歓迎したい、おもてなしをしたい。長期間働きにきてくれる人にも、いいまちと思つてほしいという気持ちで取り組みましたが、失敗しました。すすめ方、やり方にはさまざまなことを注視して考えなければならぬ、という教訓になりました。

行政・自治体職員と各団体の関係は

佐藤 松永さんもさまざま努力されてきたと思います。ご苦労したことがあつたと思います。

松永 失敗はありますが、さほど苦労はありませんでした。吉岡先生が行政の担当者に報告書を投げられたことを紹介しましたが、私たちが本気だと分かると、担当者は一番の味方になってくれました。

吉岡先生は基調講演のなかで、役所はゴールの見えない仕事は不得手だといいましたが、逆にゴールのある仕事は得意です。私たちはこうやりたい、最終的にはこうしたいので、役所の役割はこれです、と話し合うと理解してくれました。資金繰りから、取り組みを翌年に先送りしようとする、ゴールは見えているのだから、年内にやらなければだめだと行政の担当者が発破をかけてくれました。行政は着実に実務をこなし、優秀な人が多いと思いました。

現在、商店街づくりサポーターセンターの仕事を通して、行政と多々やり取りをしています。商店街の活動のためにこうした制度を作ってほしいと話し合うと、すぐ対応してくれます。商店街のイベント向けの補助制度を要望すると、市は真剣にいろいろ考えてくれます。昨年度は、財政課の査定ではねられて実現しませんでした。担当者は今年度再チャレンジすると積極的に取り組んでもらっています。私たちがこうしたゴールを目指していると言明すれば、的確にサポーターしてくれると感じています。

佐藤 会場には多くの自治体労働者、地方公務員が参加しています。石川さんは取材の過程で自治体職員に対する苦情とか、要望や改善を求める声を聞いたことがあると思います。会場のみなさんには耳の痛いことかもしれませんが、幾つかを紹介してください。

石川 自治体職員がいる場で言いづらいのですが、商店街の方が活動していくなかで、いま市町村や道、国にソフト事業向けの補助制度がないという話が多くあります。人的な面も含め、商店街が自前の負担でやらなければならないので、この面をサポーターしてほしいという声があります。

いろいろな団体の話を聞いたなかで、商店街をはじめ各団体がどう活動をしているのか、何を目的に取り組んでいるのか、自治体職員は現場にきて見てほしい、という声があります。そして、むろん港まつりであれば観光課が、商店街であれば産業課と関係があるのですが、それ以外の課と連携できることはないか、市役所内の横の連携

を活かすことをできないのか、という意見もあります。

自治体の職員としてではなく、一市民として、住んでいる地域に対して何ができるのか、一緒に考えていくことが大切だと思います。

佐藤 ありがとうございます。いろいろな示唆に富んだ、なるほどと思う話がありました。私が感じたこととして、吉岡先生をはじめディスカッションの場に並んでいるのは、民間「系」の人たちです。

私は両親とも役場の職員だったので、役所「系」に近い環境にありましたが、役所系で考えますと、役人だからアイデアが浮かばないというわけではありませんが、一般的にはどうもそういう傾向にあるような気がします。

役人の習性として、まずデメリットを考えます。これをやったら、どういう問題が起きるかを考え、問題が起きないようにするためには、と裏から考える傾向があります。議会対策など様々なことがあります。前向きにやれることをやっていこうという積極的な姿勢で、良い意味で、こうしたら失敗すると、ネガティブリストを考えていないように見えます。

住む人が室蘭を知り、地域を好きになる

佐藤 さて、このあたりでフロアーからの質問、ご意見を受けて、それに応じて後半の討論をすずめていきます。

道職員 松永さんにお聞きします。室蘭に来て四年になります。北海道のこれからのあり方として、どうアピールできるかが課題になると思います。今年、室蘭のある納豆製造会社が倒産の危機にあることがツイッターを通じて知られると、日本全国から注文がくるようになりました。

企業はPRが必要だと思いました。道は様々な内容をホームページで工夫して知らせているのですが、見ておもしろくない。おもしろくPRすれば、多くの人が見てくれると思うのですが、輪西の商店街は今後どのようにPRしていくのかお聞かせください。

松永 輪西に住む住民にしっかりと施設をPRすること、商業施設なので商品を買ってもらいたいと商売にならないので、室蘭のなかでどう認知してもらおうかです。「ぶらっと。ていつい」の施設だけでなく、輪西という街全体がおもしろいことをやっていると思われる組織でありたい。輪西商店街は小さな商店街ですが、正月の「ガンガン叩き」という福袋を配って歩くイベントから始めて、七月にワニ祭りという商店街のお祭りなどをを行い、どんどん発信しているつもりです。

輪西だけでなく、室蘭を北海道、全国に向かってPRするのは、ニュースやフェイスブックなどいろいろなあるでしょうが、住む人が室蘭のことを知って、室蘭を好きになって、室蘭のことを発信するのが基本です。いろいろな情報を出しているだけでは広がっていかず、一人ひとりの市民が、室蘭の良さを来た人に伝えていくことに、発信力があると思います。

室蘭ルネッサンスの理事長だった平さんは「輪西いいべ、室蘭いいべ、だからこれやるべ」と口癖のように言っていて、その言い方に感化されてまちづくりをやってきました。青柳さんと同様に平さんは私にとつても師匠です。なぜ師匠かを考えると平さんは室蘭が大好きで、常に輪西いいべ、室蘭いいべ、と言っていたからです。

もう一つは、いま映画作りに関わっています。北海道出身の坪川拓史さんという映画監督が東京から室蘭にやってきて、映像的にこんないいところは日本中探してもないと言い、写真家の山口一彦さんからも同じことを言われました。

室蘭市民は室蘭のことを「何も無い、きたない」としか言いませんが、一カ月の間に二人の映像のプロから「こんな良いところはない」と言われ、室蘭を題材にした映画をつくることを目指しました。

PRの第一歩は、地域のことを住民が知り、好きになって発信することだと思います。

佐藤 さきほど石川さんも、好きでないものは勧められないと言っていました。次にフロアーからの発言をどうぞ。

縮小するまちづくりの悩みと集落の価値

道南町役場職員 町は大きく三つの集落があります。二つの人口の少ない集落では、施設が古くなったこともあり学校と保育所を廃止して、中心市街地に集める考えがあり、これをコンパクトシティと名付けています。でも何か、取り返しの

つかないことをしている気がしてならないのです。常時子どもが二〇人くらいいる地域から保育所を廃止するのは、もうその地域に住むな、というメッセージになる気がします。ただ、自治体職員として財政状況などを踏まえると、縮小するまちづくりも分かりますが、どうしたらいいのか悩みます。

少子化時代のまちづくりと関連して、コンパクトシティをどう考えたらいいか、吉岡先生にお願いします。

佐藤 ありがとうございます。では、吉岡先生お願いします。

吉岡 よくダム理論ということが言われます。小さな集落から中心部に集め、さらに小さな町村から拠点都市へ集め、大都市へ一気に出行かないようにダムをつくりせき止めるということですが、果たしてこれでうまくいくのだろうか。

現実的には、地域への投資には限りがあり、従来通りのものを集落単位にそれぞれ残しておくのは困難になってきている。ただ、集落にはそれぞれ歴史があり、そこに価値を見だし、行政だけ、あるいは住民だけで行うのではなく、それぞれが協力してやっていく。いわば三方一両損のやり方で、輪西のまちづくりがその例です。これからは三方が利益を得ることはないで、それぞれが負担し、カバーしてまちづくりをしていく。

小さな集落で何を残していくかを、もう少し検討してはどうでしょうか。そのなかから可能性が出てくると思います。たとえば、保育機能は行政だけが担うものなのか……とか。一方で、どうし

ても行政にやってもらいたい、どうしても行政がやるべきという項目がある。その狭間で見直す、苦勞しながらも展開していくと思います。

輪西のときは、松永さんたちに、どれだけ成功の可能性があるのか聞かれました。私は針の穴の可能性しかないと言いましたが、穴が空いているのは幸運で、三年経てば穴は閉じてしまう。懸命に穴をこじ開けて突破していくのか、それとも穴が小さいからと止めるのなら、止めるなりのことを考えるが、どうしますかと問うと、針の穴でも取り組むという結論になりました。

外からみると針の穴でしたが、実際にやってみるともう少し穴は大きく、実践することにより、穴は徐々に大きくなりました。振り返ると、剣が峰のような状況の連続だったので、みんなが注意深く、協力してすすめていくことができました。まず実践して、可能性を探ることが大切です。失敗することもあります。実践することによって展望が開けます。

佐藤 保育所についてのご質問でしたが、小中学校の統廃合について、児童生徒の保護者からみると全校生徒が一〇人くらいだと少なくて、勉強や友人形成が心配になります。したがって、統合した方が良い、と考えることが多いと言えます。

一方、地域の人たちにとつて学校は地域の拠点なので廃校に反対し、世代間の対立が生じる場合があります。そうすると、児童数を増やすことが必要で、地域の人たちだけでなく、ほかのまちから子ども達を受け入れることを考える。そうした発想もあるかと思えます。つづいてフロアーからど

うぞ。

職員の三面性とまちづくりを楽しむ気持ち

上川管内市職員 冒頭の自治研基調提起にもあつたように、私たちには自治体職員、地域住民、そして労働組合の三つの面があります。職員としてまちづくりの業務に携わり、地域のコミュニティで各団体に参加してまちづくりに関わっている人もいます。そして自治体職員の労働組合としてまちづくりにどう関わればいいのか、ご示唆をお願いします。

佐藤 全員からご意見をいただきたいと思いません。青柳さんいかがですか。

青柳 私は室蘭青年会議所で一年間まちづくりの活動をしました。その先輩達が室蘭ルネッサンス運動を始めたので、自然の流れのように現在まで活動しております。この運動は米国のピッツバーグルネッサンスがお手本でした。室蘭同様に鉄鋼産業で栄えた都市ですが、世界的な鉄鋼不況とともに衰退したまちを、メロン財閥の支援もあり、米国でも有数な先端産業のまちになりました。

これを目標にして室蘭ルネッサンスが始まったのですが、幾つもの挫折をしました。まちづくりは、住みやすい・暮らしやすいまち、働きやすいまち、文化の薫り高いまち、青年が楽しめるまち、この四つの柱が議論になりました。働きやすいまち以外はなんとか達成しましたが、就労の場をつくることは難しい。

企業誘致については市の助成措置があるのに対し、地場の企業に対する支援は薄い。また雇用や地場企業に対する支援の制度を使うのが大変難しい。先ほど触れた鯨・イルカウォッチングは、当時の岩田市長と一緒に噴火湾海洋動物観察協会の会長をやっていたので、市からの助成がありました。市長が交代してから助成はなくなりました。いろいろ理由はあるでしょうが。

ルネッサンスが始めた事業に賛同して鯨ウォッチングをしていた会社が止めるというので、ルネッサンスのなかで相談し、ウォッチングを支えたい有志がこの会社を買い取って現在に至っています。このとき、事業を継続するのに市の助成制度は様々な制約があつて使えませんでした。同様に地場産業を育成するのにどの自治体もいろいろ助成制度がありますが、使いやすい制度になつていない。

住みやすいまち、文化の香り高いまちづくりは、ルネッサンスのような団体は得意な活動です。制度をつくるのは自治体なので、使いやすい制度、活動をサポートするシステムを考えてほしい。まちづくりの活動は楽しくなければできません。簡単ではありませんが、職務としてだけではなく、多くの市民と共に楽しくまちづくりをするという考えを持てれば、自治体職員の関わる機会もさらに増えると思います。働きやすいまちづくりは、ルネッサンスだけではできませんが、これは、行政と企業がそれぞれの役割分担を明確にすることが大切に思います。

佐藤 つづいて松永さんお願いします。

松永 特に自治体職員にこうしてほしいというのはありませんが、私たちは企業を通して、個人として、商工会議所などの団体での地域づくりとの関係になると思います。

団体としての地域づくり、団体同士の集まりで話し合うと新たな方向が出てくるので、地域住民として地域でやること、企業や役所の仕事を通して地域に貢献すること、そして自分の所属する団体で地域貢献するなかに、団体が集まることによつて、いろいろな価値観のあることが分かり、室蘭はこうすすむ道があるとか、室蘭の特性に気づくことがあります。

私たち商工会議所という団体の立場からすると、いろいろな団体と意見を交わすことによつて、自治体のすすむ方向も見えてくると思います。

佐藤 ありがとうございます。石川さんお願いします。

石川 室蘭のことになりますが、労働組合が積極的にまちづくりのイベントに参加することで、互いの連携を深めてはどうでしょうか。

市内には商店街振興組合が八つありますが、このうち三つの振興組合で商店街のイベントを開催できなくなっています。会員の高齢化により人手が不足している、体力がなくなれない。室蘭市は創業希望者への出店の助成制度を設けていて、街場の商店街には若い経営者も出てきています。商店街全体としては人手が足りない状況です。

労働組合が、地域の賑わいづくりの活動に協力していければ、今後の互いの連携を深める切っ掛けになると思います。

まだ半分残っているというセンス 職員が市民として活動できる環境とは

佐藤 吉岡先生いかがですか。

吉岡 行政の仕事でこれから必要になってくる要素は何だろうか。これらは目に見えないものを扱うことが多くなるということで、地域のシンクタンクになってほしいというのが、さきほどのメッセージでした。人口が減少していくことで困るところは、有意な人材も少なくなっていくことです。輪西に関わったときは、地域の人口が五千人を切るか切らないかというときで、五千人を下回ったら、何もかも足りなくなるという話をしています。

商店街のホームページをつくるのに、五千人がいれば誰かしてくれる人がいますが、三千人を切ると外部に頼むしかないかもしれない。外国人が来ても五千人いれば誰か外国語を話せる人が見つかるでしょうが、人口が少なくなると難しくなる。

外から人材を呼ぶことができる、関係性を持つ人。地域のなかで動きを起こしていく関係を取り持つ、マネージャーのような役割の人が重要になってくると思います。ほかの人がプレーしやすい環境をつくる、人のつながりをつくるのが大きなポイントになると思います。

そのときに気をつけていただきたいのが、まちづくりをみんなでやるときに、酒瓶にお酒が半分ある時に、「もうこれしかない」と思う人は、縮小均衡に向かっています。「まだ半分あるぞ」

と思うのが大切で、ちょっとした意識の違いで、まちづくりの突破口を開き、流れを作っていく力が生まれます。「まだ半分あるぞ」と思えるセンスを意識してほしいです。

佐藤 労働組合としてどのような活動が望まれるか、という質問だったので、先ほども出ていたように、職員も一人の市民として活動してほしい、ということはよく聞きます。札幌市の市民自治推進会議の座長をしており、昨晚その会議がありました。そのなかで委員からは札幌市職員も地域市民として活動してほしい、という意見は以前から出ていました。私たちの評価として職員が市民として活動できる環境づくりに努める、と報告書に書くことになりました。

これに対してある委員から、職員が市民として活動できる環境づくりとは何を指すのか、これを読んで市民は分からないのではないかと、この意見がありました。それに関しては、住民側の問題と役所側の問題の大きく二つの面があります。前者に関しては、たまに地域の行事や集まりに出てみると、市の職員なのだから何とかしてよ、と言う人が地域の人たちから出てきます。でも、市役所の職員だからといって、町内会やPTAの期待や要望に応えられるわけではない。役場の職員も同様だと思います。自治体職員が住民として活動してほしいと期待する側の意識、環境づくりの問題があります。

もう一つは、役所の側が定時に仕事を終えさせ、労働環境の問題です。残業が多い、土日の休日出勤もある職場の職員に、地域での活動を要求

するのは無理です。職員が住民として地域で活動できる時間を確保するための労働環境をつくるのが必要だと思います。自治労の立場でできるのは、そこではないかと思えます。

さて、残された時間も少なくなってきました。最後にお一人ずつ感想や言い残したことを、青柳さんからお願いします。

事業の波及と市民の誇り ゴールがみえる取組への行政の手伝い

青柳 室蘭ルネッサンスは実践する団体です。

二九年間に多くの事業を手がけましたが、単年度事業でも広い意味でつながっていることがありますが。一九九六年に行った「プロヴィデンス号来航二〇〇年祭」は、その後二〇〇八年洞爺湖サミットの際、英国大使の表敬訪問を受けました。二〇〇年祭のときは別の大使でしたが、室蘭ルネッサンスに対し、プロヴィデンス号を通じての室蘭とのつながりを大切にしていきたいと述べられた時には、当時の大変さも忘れ報われた気持ちになりました。

一度だけの事業でも、そのつながりはさらに広がっていると思います。市民大学はルネッサンスとしては現在実施していませんが、いま市民の手による室蘭港立市民大学につながっています。このように事業は積み重ねていくことで、ほかで継続されたり、生まれ変わっていくこともあるので、まちづくりの活動は、本当に大切なことだと実感しています。

繰り返しになりますが、希望の灯「測量山ライトアップ」は室蘭の誇りづくりです。室蘭の海で鯨が、イルカが見えるように、ライトアップも子ども達の原風景に残ればと思いますながら、これからも活動をつづけたいと思います。

佐藤 ありがとうございます。つづいて松永さんお願いします。

松永 今回パネラーを依頼され、テーマの一つに地域の活性化に向け自治体は何をすべきかがあり、考えてみましたが「協働」という言葉が浮かんできます。皆さん知っているようにありふれた言葉ですが、市民のやりたい事をしつかり後押ししてほしい。私たちは行政に、あれをやつて、これをやつて、という要望はしません。私たちがやりたい事をバックアップしてほしい、手伝つてほしい、とどんどん言っていくつもりですし、ゴールが見え、一緒にやつていこうと思つたら、行政にバックアップしてほしいと思つています。

先ほどは簡単に触れた市民会館について補足説明します。古い市民会館を二〇〇メートルくらいの移動させて、街の核施設「ぷらつと。てついち」の隣に、新しく市民会館をつくることは、困難だと思つていました。難しいけれども、ワークシヨップを行つてみんなの意見をまとめていくと、市民会館を移転オープンする気持ちが強くなつてきました。

旧市民会館は道内で二番目に古い施設で、駐車スペースが一五台分しかなく、大ホールが二階なのにエレベーターがなく、高齢者は大変でした。ホールの横に小さな会議室がありますが、ホール

の音が会議室に漏れるからと会議室を貸していませんでした。音が漏れても何とか貸して儲けようとするのが商人の発想ですが、役所はそう考えるのだと驚きました。そうしたとき、市民会館が移転したらどうするかとワークシヨップで議論すると、市民が使いやすい施設にする、結婚式と葬儀ができるようにする、一日に二回転も三回転もさせて儲ける、という意見が沢山出てきました。

みんなの意見を聞くうちに市民会館を新しく移転しなければならぬ、それが輪西の街の核になるのであれば一石二鳥だと考え始めました。みんなで話し合つてゴールが見えてくると、行政もやろうとパートナーシップをくんだ経緯があります。繰り返しになりますが、行政の人にやつてほしいのは協働で、私たちがやりたいとゴールが見えたことに、一緒なつてやつてほしいことです。

来訪者で気づく地域の魅力と資源 次元を変えて方向、目標を考える

佐藤 ありがとうございます。石川さんいかがでしょうか。

石川 地域資源について一言申し上げます。地域資源とは、日常生活にある「こまだ」と思います。普段当たり前に接していて気づいていないことが、外から来た人が見ると思いがけない集客のツールになり、それを具現化したのが「撮りフェス in 室蘭2016」です。

室蘭には工場夜景ですとか、白鳥大橋などいろいろな写真の撮影スポットがあり、全国から参加

者を募り写真を撮ってもらう。来週九月一七日午後三時から、翌一八日午後三時までの二四時間滞在型フォトコンテストです。エントリー定員二〇〇人が決まり、遠くは兵庫県からの参加があり、このほか道外からは大阪、奈良、岐阜、富山や関東の都県、道内各地からやつてきます。室蘭に魅力があるから写真を撮りに来ます。

地域に住む人が減少していくなかで、交流人口が増えていくことが、地域の活力になる要素だと思つるので、地域資源を活かした取り組みが今後大事になると思つています。

西胆振の室蘭、登別、伊達の三商工会議所では、地域資源と結びつけた集客プランを作成中で、来週、福岡県柳川市へ調査に行き、私も同行します。どのような地域資源をつかつて集客しているのか取材し、室蘭をはじめ北海道の参考になることを紙面で紹介したいと思つています。

佐藤 私たちも注目したいと思つています。最後に吉岡先生お願いします。

吉岡 会場の皆さんは、道内の人口減少最先端地域の一つである室蘭でどんな話が聞けるのだろうかと思つてきたと思つています。あれもできない、これもできない、という話ばかりかと思つていたら、意外に明るく、未来志向で取り組んでいると感じたことでしょうか。

これから地域で問題はたくさん出てきますが、そうしたなかでも一つの方向、目標が見つかるかどうかで、目標に向かつていくなかで課題が一つずつ解決していきます。最初からあきらめていけると何もできない状態になつていきます。自治体職

員の立場、労働組合の立場で皆さんのネットワークを活かして互いに学びあい、光明を見つけていってほしい。

先ほど地域での小中学校の統廃合の問題で、ほかのまちから子どもをつれてくるのが話に出ていましたが、道内どこでもやるようになりました。私も十勝管内の町の奥まった集落の学校維持について手伝いをしていて、住民は何か学校を維持したいと頑張っています。

しかし、将来の人口減少を考えると、子どもの奪い合いになります。維持するために頑張りつつも、一方でそうならないときにどうするかを考える。地域に学校が必要なのか、何が必要なのか住民に話を聞くと、地域の核になる存在がほしい。それと先生が異動でまちの外からやってくるのが刺激になると言います。

そうすると、学校が有してる様々な役割が重要なことだと分かってきます。山村留学を頑張りつつ、一方では、学校がなくなつたときは自分たちで学校的なものをやればいいのではないかと、というプランを考える。たとえば地域農業の技術や、集落の生活、暮らしの蓄積が教材になったりする。地域立のコンセプトの動きを練習していけないだろうか、ということプランBとして準備しておく。

何か事が起きてからでは遅い。空知管内産炭地の場合がそうでした。まったく考えられず、濁流に流されていく状況でした。ロープを用意しておけば、濁流の中にロープを投げ入れることができ、何かあったときに行動することを意識してお

けば、行動できるようになる。そういったことを深く考えるのが行政は得意だと思います。したたかさ、確実に目配りが大きく存在として、行政に頑張ってもらえれば、自治体職員は地域のなかで必要な存在となります。在職中に必要な存在になった職員は、退職後も住民から感謝という報酬を得て充実した生活を送ることができると。そういった、長いスパンの価値観を持ちながら考えてほしい。

いずれにしても、それは実践を通じて培われるものですし、今度は空知での私の活動も見ていただきたいし、皆さんの活動も参考にしていきたいと思えます。

佐藤 ありがとうございます。最後に若干のまとめをいたします。パネルディスカッションのサブテーマの後半は「ホンモノのまちづくり」となっていますが、ホンモノのまちづくりとは何だろうか。

パネラーの皆さん、そして松永さんが質問に答えたなかで、要は誰のためのまちづくりを行うのかを考えるのが、ホンモノのまちづくりだと感じました。まちに暮らしている人にとって暮らしやすい事柄はいろいろ並びますが、一方で私は、暮らしている人が苦勞しないまちがホンモノのまちづくりだと思います。住んでいる人が、苦勞しないまち、暮らしつづけても大丈夫なまちをつくるのが、ホンモノのまちづくりだと思います。

道内各地の自治体職員が、退職してから札幌に移り住む人がたくさんいます。そのこと自体は否定しませんが、住んでいる人が苦勞しないまちを

つくれば、退職しても仕事をしてきたまちで暮らしつづけることができるのではないのでしょうか。自治体職員として働き、退職してもこのまちに住みつづけてよう、というまちをつくるのがホンモノのまちづくりではないか、ということ吉岡先生の基調講演、各パネラーのご発言を聞いて強く思いました。この感想を一つの締め括りとして、パネルディスカッションを終えます。パネラーの皆さん、吉岡先生、会場のみなさん、ありがとうございます。

本稿は二〇一六年九月九日、室蘭市で開催した自治研全道集會・全体集會の基調講演とパネルディスカッションをまとめたものです。

文責・編集部